

No.468 2022年 11月1日 (火)

つくしんぼ

11月号
(霜月)
文責：瀧口

10月22日 国際吃音啓発日 ~Internationala Stuttering Awareness Day~

1998年に国際吃音者連盟 (ISA)・国際流暢性学会 (IFA) などによって定められた、世界に数百万人 (総人口の1%) いるとされる吃音 (きつおん) や言語障害を持った人に対する理解啓発を目的として定められました。今年のテーマは『BEING SEEN, BEING HEARD~見られること、聞かれること~』。近年、『吃音症』についてメディアで取り上げられることが多くなってきました。当事者や支援者の交流の場において『学校の先生がもっと勉強してほしい』という書き込みに胸が痛くなりました。「無知は罪」です。自分の無知で子どもを傷つけることは、教職員としてあってはならないことです。今号は、吃音当事者の声を集めました。吃音の出方も人それぞれ。考え方も人それぞれ。ことばの教室では、①吃音について学ぶこと②それぞれの考え方に寄り添い、気持ちの整理を手伝うこと③担任の先生へサポートのお願いをすることに努めています。新見市の先生方にも、関心を持ち啓発に協力していただきたいと思います。

今でも吃音で困ることのない日はなく、症状がなくなることはない。しかし「周りがどう思うかではなく、自分がどう思うか」を考え、行動を変えていくことで、生きやすくなることもあると思っている。

かけ算を何度も言われた。分からないのではなく、ことばが出ずストレスだった。

教育者の方であまり吃音について理解されていない方に限って「大丈夫ですよ。」「治りますよ。」などと言われる。親として、この方、吃音のことご存じないなあと思っています。

話じぶらそうだから、代わりに言ってあげようっていうふうな「話の最中の支援」はいらぬ。待つっていうのは、その人を認めることにつながっていると思っています。

ことばをくりかえしてるっていうのは分かるんですけど、なんか止められない感じで。吃音が出ることには、正直、面倒くさいなと思っています。

授業で当てられ、すぐに答えられなかった時、先生がため息をつき、次の人を当てたのが嫌だった。

笑う人たちは、本当に子ども。周りの理解してくれる友達を大切にしたいと思う。周りとはべずに自分らしくやっていたら大丈夫。

周りに知ってほしいのは、「普通」を押しつけないこと。話し終わるまで待ってほしいこと、吃音を持っていても他の人と変わらず接してほしいということ。

大学の教授から「家で音読練習をしろ」と言われた。練習したって言えなくてつらくなるだけだから、練習しろと言わないでほしかった。

小学校の先生に「落ち着いて」と言われた。その接し方まちがってるよ。



ぼくも子どもの時に笑われた経験があつて。心のダメージは計り知れないものがあつた。大人になったから言えますが、娘には吃音とうまくつきあってくれたらと思います。

緊張が直接の原因ではないことを知ってほしいです。緊張しなければ、症状が出ないと誤解されているような気がします。リラックスしていても吃音が出るということが、非吃音者の方には意外に感じるのかもしれないですが。

参考：『菊池先生の吃音ライブ』 『Yahoo!ニュース：国際吃音啓発の日：注文に時間がかかるカフェ』 『バリバラ：きつ音のある子どもたち』

本人がわざわざカミングアウトしなくちゃいけないっていう、その環境自体をそもそも変えていかんとアカンのかなって思ってるのと、それから、友だちから話し方について聞かれたらサラッとな、「え、これが僕の話し方なんですけど、なにか？」みたいな形で流せる社会っていうか、環境が一番いいかもしれないなと思うけどな。
~ 玉木幸則 ~ バリバラ：きつ音のある子どもたち

